

南島つれづれの記(その5)

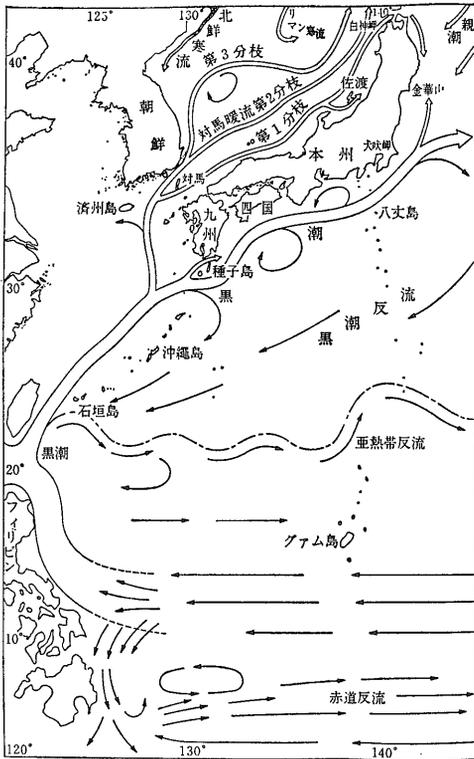
～古代文化を区切った宮古凹地～

矢崎清貫 (燃料部)

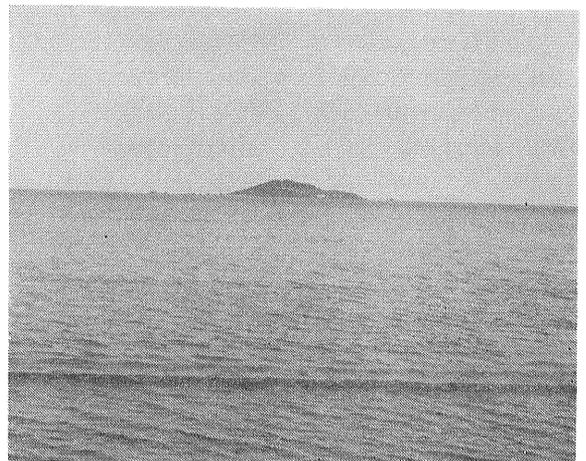
神話のなかの踊りと民族

「柳田や折口の沖縄研究も ヤマトウ (日本) の側よりする南島研究であつて ウチナワ (沖縄) の側からのヤマトウを照射する視角は乏しかった。 そのことがまた改めて問い直されねばならぬが 同時に沖縄と朝鮮 沖縄と中国とのあいだには ヤマトウとそれとは異なる独自の関係があったこともたしかであった」(上田正昭「倭国の世界」講談社現代新書)。 九学連合沖縄調査委員会(民族・民俗・社会・人類・宗教・心理・地理・言語・東洋音楽)が最近発表した報告書のなかには『体質人類学的なキメこまかな調査によつて 沖縄人は日本人の変異幅内にあり 最南端に分布する日本人とみとめて差しつかえないという証明がなされている。 さらに稲作以前に畑作農耕があつて その伝統も今日に伝えられていること。 「マキ」・「ハラ」門中などの同族的な

結合が強く 祖先の祭祀が男系の男子によつてなされていること。 また兄弟姉妹と結婚によつて結ばれた「カタイ」と称する結合など 血縁的なものによつて結ばれた年中行事なども「ムトウ」という草分的家筋を中心におこなわれていたものが 祭祀の拡大 ひいては供物の豊富を願うことから地縁的な結合が進められてゆく過程など本土における村落社会発展の基本的なものをここでは現実に見ることができ 多くの示唆を与えられる』とされている。 このような記事をみるとき 宮古の島々に残る開基伝説のなかにある兄妹婚と不具児の出生が「カタイ」と称する結合と何らかの関係があるのでないかと考えたりするが この兄妹婚と不具児の出生は「人類起源神話」との結びつきが深い。 イザナギとイザナミは高天原で オモダルとアヤシコネという夫婦の神に続いて生成したとされているが この古典神話の中ではイザナギ・イザナミの両神は兄妹の関係であつて オノゴロ島に降り立ち 最初の夫婦の交わりをしたといわれている。 この交わりの様子が宮古島では現実に『ふなぐ踊』(ふなぐとは交接のことを意味している)が大神島に残っている。 この踊りは大神島の祖神祭での行事の一つであつて その実態をみることは到底できない。 宮古島の北部の狩俣ならびに島尻部落には ほぼこれに似た行事があるといわれており いわゆる 大神島文化圏と呼ばれていて他の部落の文化と異にしている。 そ



第1図 日本近海の海流図



第2図 犬神島(うがむしま)の神は大神であつて 奥の院には司以外は立入禁止されている

のなかでも 大神島の神がもっとも大神であるということになっている。 そのことに理由するのか大神島は祭即政の社会であり 宗教生活と社会生活とは 切っても切り離せない関係にあって 神山への俗人の立入を許さない理由でもある。 この「ふなぐ踊」を村の古老に聞くと 村の未婚の青年を10名ほど選んで神女10名の相手となって 身に糸も纏わぬ裸身の姿で 神女達の所作を真似て踊るとのことである。 この神山は 拝所の入口までは一定の許された日には行くことが出来るが 奥の院にあたる所には司の外絶対に立入禁止である。 拝所には 陰陽の神のシンボルと思われる石が神体として安置されている。

このように 日本神話の一部が昔から宮古諸島に広く伝承されていて 現在もそれが引きつがれ祭の形式をかりてみられることは 多くの示唆を与えてくれる。

宮古島では 「とつぎ教え鳥の伝説」があって その内容もほぼ前述したことと同じである。 ただ男女の道を知らない イザナギ・イザナミの二神に せきれい鳥の雌雄が庭前に舞い下りて嫁ぎの道を教えた。 そこで「せきれい鳥」を 「とつぎ教え鳥」またの名を「しいふなぐり」と呼んでいる。「しい」「ふなぐ」「ふり」は三つの語からなって 「ふなぐ」は交接のことを意味し 「ふり」は真似るとのことである。 宮古の方言で「せきれい鳥」を 「しいふなぐ鳥」と呼んでいて 前述したふなぐ踊りへとつながりがあるのである。

よく日本の文化を 吹溜りの文化と呼んでいるが ある意味では日本の地質学も吹溜りの地学かも知れない。 今年の2月に行なわれた コロキウム「琉球列島の地質学的諸問題」の研究集会に 九大の松本先生が話されたなかで 日本列島の地質に考えるとき 「バック」にあ

る中国大陸や朝鮮半島・沿海州あるいは 南へつながらる変動帯のアークラを含めて考えることが特に重要であるという意味のことを講演された。 このような観点からみれば 地質の立場でも吹溜りということになるかも知れない。

宮古の島々の先住民は どのような人々であったのか われわれが使っている日本語という言語も 南島語系の基語の上に アルタイ系言語の強い影響がつけ加えて成立したと言われている。 さらに 岡氏による 先史時代の日本列島には 少なくとも五つの種類の起原を異にする種族がいたと想定している。 それによると縄文中期のはじめのころに タロ芋 ヤム芋などの芋類の栽培した低農耕を伴う 狩猟採集民がアジア大陸の沿岸地域のごくからか 一つの流れにのつて上陸したものと考えられていて この文化は 土隅 土面 集落構造などの文化要素が メラネシア原住民の文化と対応するといわれている。 この文化から生まれた要素には 男性秘密結社の祭り（ナマハゲなど）があるとされている。 とくに宮古の島々には 多少ニュアンスのちがいがあがあるが 来間「パーント」伝説や島尻「パーント」がある。 島尻「パーント」は 島尻部落の祖神祭に「フアンド」が現われて部落内を暴れ廻り 人の姿を見つけたら何処までも追いかけてこれを捕える 「フアンド」は 全身に田圃の黒い泥を塗り 仮面も黒く塗り目と口だけが赤くなっている。「フアンド」という言葉は 食人の意味を持つ言葉であって「フア」は現在食うという言葉で使用されており「ント」は 大人の「ウト」で人のことを意味していると 前でのべた「ナマハゲ」と合い通ずる祭りのように思える。 とくに 本土の一部には タロ芋の一種である里芋を正月などの祭事のおりの食物とし



第3図 女酋長が長いこと続けられた狩俣部落（海峡の先にくすくうかんでみえるのが伊良部島）



第4図 島尻部落の神女たちが こもる聖なる小屋（この日には部落人といえどもこの小屋のある岬へは入れない）

第1表

日本旧石器時代編年表

(日本歴史1 岩波講座より)

	九州	瀬戸内	中部	関東	東北	北海道
晩期	船井2層 船井3層 (B.P.12,400±350, 12,700±500) 船井4層 船井7層 (B.P.13,000±600)	上里岩6層 (B.P.10,085±320) 上里岩9層 (B.P.12,165±600)	柳文 荒屋 (B.P.13,200±350) 矢出川 (休場B.P.14,300±700)			祝梅上層 立川 後期白滝 (12,000-13,000) アチカルシマナイB下層 (31地点B.P.15,800±380) 前期白滝 (16,000-18,000)
ナイフ形石器など	百花台下層 上馬6層上部 船井9層	井島II 宮田山 国府 鷹羽山II	伊勢見山上層 伊勢見山下層 茶臼山 杉久保 (B.P.15,100±300, 17,700±500) 小坂	武井上層 茂呂 岩谷II 大畑 横道 東山	角二山2層	祝梅下層 (B.P.21,450±750)
期	上馬6層下部	井島I 鷹羽山I		岩谷I	角二山3層 成田?	
前期	船井15層 (B.P.>31,900) 早水台下層 (推定100,000)			権現山 (30,000-70,000) 不二山 (70,000-130,000) 星野7.8層 (推定50,000-70,000) 岩谷0 (推定100,000)		

て特別に食べる風習(いも煮会もある意味で含まれる)などの中に残存していると考えられている。その次に古い文化としては縄文末期に渡来した太陽女神アマテラの崇拜やシャーマニズム司祭的な役割をもつ女性支配者の存在などがこの文化の特徴であって沖縄の多くの島にある「カタイ」とか「ムトウ」という草分け的家筋を中心とした文化ではないかと考えられる。とくにこの時代の文化の中心的役割をもつ司祭者が女性であるということがこの文化の特徴とされている。言語的にはアウストロアジア語系で狩猟生活とともに山地丘陵の斜面の焼畑において陸稲を栽培したと考えられている。この女系相統というか女性支配者に関するがらには宮古島の狩俣部落にあつてそこでは女酋長の支配が続けられたらしくその一例は前でのべた「ふなぐ踊」にも関連している。狩俣祖神祭に奉仕する神女は30名となつていてこの人々は神と呼ばれ男は全然祭祀に加われない。

弥生時代初期になると満州(中国東北部)朝鮮方面から「アハ」や「キビ」などの雑穀を持ちこんだ文化がある。

前でのべた2つの文化は南方系といわれるものであるがそれ以後の文化は北方的要素と言われていることからこの文化がいよめる「流求」文化圏(「隋書」流求国伝 流求とは台湾のことと解される)にその時代にはいつて来たとは考えられない。このことは国分直一氏の考古学上の立場から先島群としてわけ本土から沖縄本島まで南下してきた縄文・弥生の土器は宮古島までは到達していないとむしろ八重山式と呼ばれる

土器の外側に耳状のつまみをもつた外耳土器によつて特徴づけられた別の世界であつたと説明されている。このようなことからみるとそれ以後九州地方に入った弥生の主体をなした文化やアルタイ系騎馬遊牧民を代表する文化はさいはての小島までにはおよんでいなかったように思える。

しかし歴史時代になってからは北からの流れも多く入っている。とくに鍛冶文化は12世紀以来頃に急激に南下している。以上のようなことから考えると先島群に入る宮古島ではずいぶん長い間の原始社会があつたことと考えられる。とくに南方系といわれる縄文中期の文化から弥生時代や古墳時代を欠いて現代的な文化へとつらなる。したがつて長い期間のブランクがある。このことが日本の原像として沖縄学があることに対してなつとくがゆく。しかし考古学的には先島群というグループに入り沖縄学という一括した範中からは隔離された場にあることを認識しなければならない。このことがさらに日本の原点としての位置づけが強くなる。前で文化のブランクということのべたがこのことは北からの流れの文化をさしているのであつて隔離されていた文化ではない。そのことはすでに「その1」でのべたように宝貝が支那への搬出で知られていることや沖縄本島那覇の城嶽貝塚で発見されている「明刀銭」を発掘していることなどである。この「明刀銭」は中国の戦国時代の末ごろに作られた刀の形をした貨銭であることから沖縄本島では西暦紀元前三世紀ごろにはすでになんらかの形

で中国本土と直接接触过いたことは明らかである。このような目で宮古本島をみる時 位置的には沖縄本島より更に中国に近く 利慾願望の宝貝を多産することからみると沖縄本島よりも多くの直接接触があつたように思える。そのことは 赤色無文土器がトカラ海峡付近を南としていることや 縄文式土器の南限がほぼ宮古凹地で区切られていることなど 何らかの関係があつたように思う。この2つの文化の謎は 地史的変遷という経過のなかに埋没されている理由によるのか多くの興味がある。

日本神話の原流が いわゆるギリシア神話の流れをくむ印欧語族の古神界の中に入っているものといわれているが その一つの流れが南島をへて本土へ上陸されたものと 他の一つは ミクロネシア→ポリネシアへと別れていったものが たまたま同一神話として現代に生きているように考えられ 神話のなから古代人の関連を考へることもないように思うが ヤポネシア人(日本人)の習性や風俗習慣 道徳のなかの底流に いわゆる南方系といわれる多くのしぐさが残像しているように思えてならない。その一つの例として 赤ちゃんが生まれ落ちると、まず「へそ」の緒を切らねばならない「日本書記」と「薩摩国風土記」の逸文には 竹製の刀をもって切つたと書いてある。このように竹製の刀で「へそ」の緒を切る慣習は いわゆる南方系といわれる南洋諸島や東南アジアで広くおこなわれている方法であつて そこに住む人種が南方系とする有力な証拠とされている。

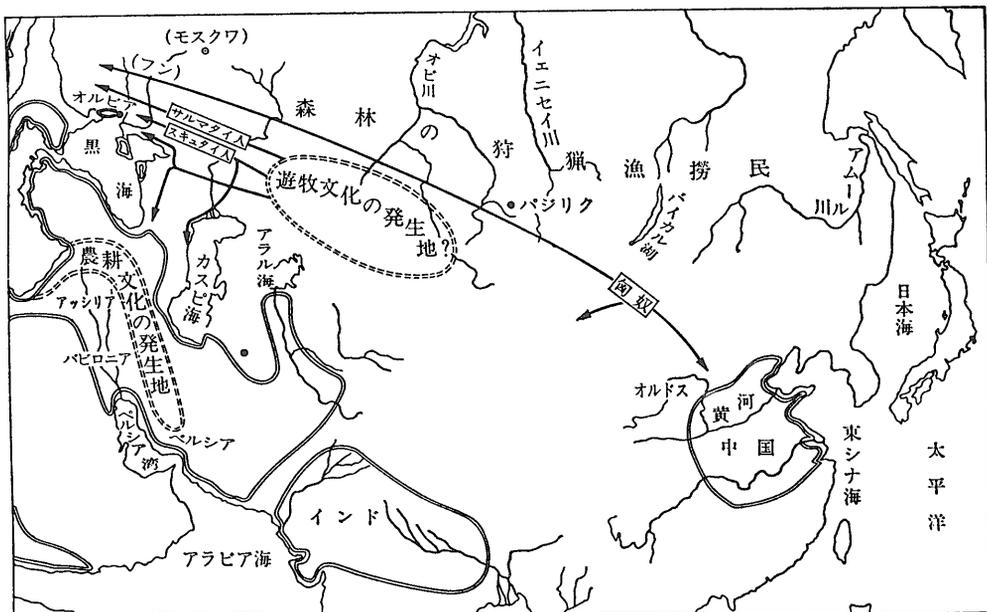
これにたいして北方系のツングース族や蒙古族などは石をもちいる方法が普通であるとされ そのことによつて北方系とする証拠の一つとされている。

以上のことからみると 多良間島や来間島に伝承される開基伝説にある兄妹婚のことも 日本神話の原流のなかにあることであつて 特別に興味のあることでもないし Y子さんやMさんが心配するように 人種が違ふのではないことも明らかである以上 大手をふつて私達は純真な大和人であることを誇りにしてほしいものである。

多くの民族学者や人類学者は 日本文化の底流による流れのもっとも古いものを海上への道(南方系)とする意見が大勢を占めているようである。そのようなことが 宮古の島々を日本人の原点として写しだし 魅力ある島への位置づけがなされ 多くの文化人の探究の場へと展開されているように見うける。しかし 琉球列島のなかで古い地質年代の基盤岩をもたない平坦な島々は他の島と比較して人の住みついた時代は新しいように考えられ それ以前は 柳田のいうでかせぎの島ではなかつたかと思われてならない。

言語と民族

言語の研究はたしかに 民族学的な一つの道筋かも知れないが 今日まで時間の経過のなかで すでに心の裏づけが稀薄になつていて こればかりではどのような仮定説でもつくり上げられるように思える。とくに宮古島には「アヤグ」という多くの語りものが 女性の伝説によつて保存されていいて 現在でも探訪を可能にしてい



第5図 前千年代中期の文化伝播(香山陽坪著「騎馬民族の遺産」より)

る。この「アヤグ」はその内容は如何にも茫漠としているがこれを排列し総合すると叙事詩的な民謡が生まれていにしへの島人等の海上での活躍がしのばれる。「アヤグ」言葉という音律にはなんとなく古語的な感覚を感じる。その1つの例を悲恋の美人「マムヤ」の「アヤグ」を紹介しておく

「保良びやうなまむや 新生り少女
野城ぬ按司 崎山の坊
海廻りや 崎廻りややりば
北の海のばなむつがなぎかと
まむやや認め 美がや見とめ
あていぬぶからす どきゆぬぶからすかいば
道出でるまむや 座ばいでは何さまで
道出では座ばいでは何さまで
子の母と見合さで 家の妻と目合さで
家の妻の臭や小便ぬかざ
まむやが匂あ こみ香のかざ
美女が匂あ にふにりの匂
見合し見る伯母 くらび見る伯父
今のこと思えば美女どます
後のこと思えば子の母どます
まむやが肝やいるみ変り 生鯨どやれば
北の海のばなたから 下り落て無ん
まむやが母や大野たら茅野だう求めりばど
大野まい 茅野まい 吾子や見ない
まむやが衣や ばたいむど細物どやりば
北風の押すちかあ 南にかい飛び
南風めうすちかあ 北んかい飛

座に連れ出した。家の妻の臭いは小便くさい 美女マモヤの匂いは「くみ香」の匂いで到底比較にならぬ。どうです伯父さま伯母さまよ 家妻とくらべものにはなるまいというところが 現在のところはマモヤが優っているが 将来を考えたら家妻がよいといわれたので 崎山坊に欺かれた美女マモヤの悲しみは 生鯨の色がチラチラ変るように 遂に北海の断崖から身を投げて死んだ マモヤの母は茅野の涯までも吾子の姿を捜しまわったけれども 彼女の姿は遂に見つからなかった。マモヤの衣物は絹物で細い織物であったので その美しい衣裳は断崖に懸り 北風には南に飛び 南風には北に飛んで見えた。
〔稲村賢敷氏の宮古島庶民史より〕

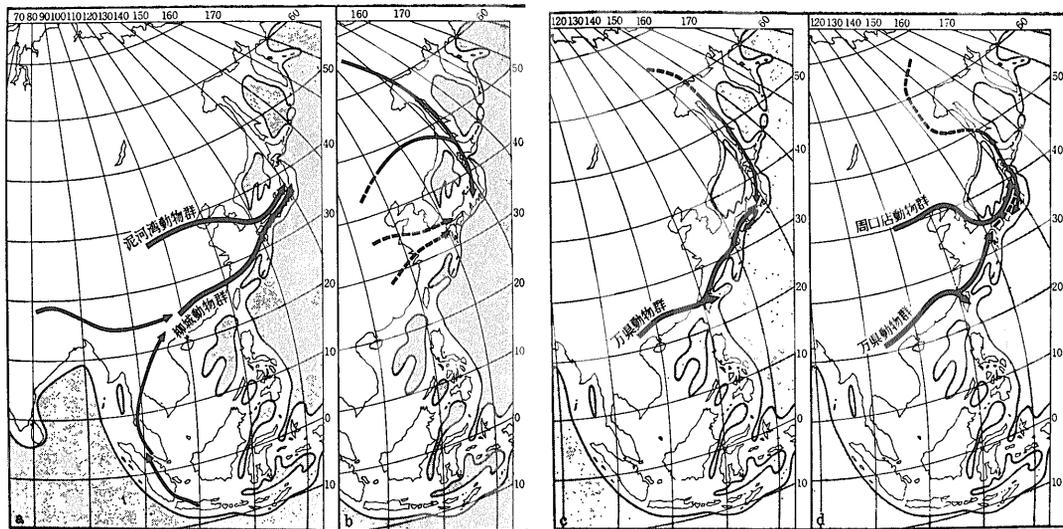
とくに宮古言語に含まれる言葉の意味や 入れ墨は南方系の習俗であつて アイヌからエスキモーの顔面文身はその北方への伝播の残つたものであるといわれている。宮古島の大神島の北にある暗礁を現在も「フシ」干瀬または「フジ」と呼んでいる。「フジ」は アイヌ語で山の一般名称とされている。このほか アイヌ語に関する2~3の伝承があるが 言語だけの類似性をもつて はたして民族の流路を思考することが出来るだろうか多くの疑問が残る。しかし 多くの宮古島の言葉が本土との間に共通性があることはたしかである。宮古島の考古学者下地馨氏の採集した記録によると 次のようである。(とくに 日本の古語と関係が深いといわれている。この言語問題に対して チェンパレン博士は「近代日本語を代表するよりも琉球語がそれを代表することが一入忠実である」とのべている)

〔意訳〕 保良平守名生まれのマモヤ(マムヤ)という美女がいた 野城按司崎山坊という若者はかねてからこの美女を慕って 北の海の断崖の到る所 漁猟に言寄せてマモヤの隠棲所を捜し求めて歩いた。漸くにして美女の隠れ所を見つけたので喜びのあまり 「そんな所に隠れ住んでいないで 道に出てくれ 座に出て遊んでくれ」と無理に勧めて少女達の踊り遊ぶ

古 語	宮 古 語	現 代 語
こはなり	くは一なり	前妻
うはなり	うは一なり	後妻
まぐ	まぐ	性交
ほんたい	ぶんだい	我儘
かてもの	かてもの	おかず
はがす	ばがす	削る(はく)
みき	みき	神酒
やぐさみ	やぐさみ	寡婦
つび	ちび	お尻
ない	ない	地震
しし	すーす	肉
いりき	いりき	鱗・頭の垢
ふく	ふく	肺臓
ぶそ	ぶすう	臍
けす	きす	下司
まる	まる	出す
まじもの	まづむる	化物・蟲物
よむ	よむ	算える
ばら	ばら	柱
おかる	おかる	別れる
つとめて	すともて	朝
こぶ	くぶう	蜘蛛
かなす	かなす(もの)	可愛いこと



第6図 アイヌの伝説がある大浦付近



第7図 前期および中期洪積世における哺乳動物群の由来 (淡正雄・井尻正二著「日本列島 第三版」岩波新書より)

ひかされて	ひかされて	情にほだされて
さだる	さだる	前に進出
ゆい	ゆい	(結い)

以上は 宮古語と日本の古語とよく一致している語彙を集めたものであるが 多くの言葉が現代でもごく一般に使用されている言葉もあるのに期せずして驚いてしまう。とくに 最近多くの若者を引きつけている沖縄には「オキナワ・ヤマト」「ユイ」の会(せつかく「ユイ」という言葉をつかうなら「ウチナワ」・「ヤマトウ」ユイの会としたらと思う)を結成する目的で多くの若者がユイの組織とその精神を直接農家から学んでいると聞く。この「ユイ」という言葉は 筆者の生まれ育った地方にも今だにうけつがれ 残っているし その組織・内容や精神にいたるまで 宮古地方の言葉と同意語であるが 民主とか自由とか平等とかの裏表の意味において消え失せていきつつあるように思う。

ある日の中食時にインドネシアにしばしば出かけている同僚と話しをする。そのなかで宮古島でいう「まぐ」という言語が インドネシアでも日常使用している言語であつて 意味も内容もほぼ同一だとのことであると聞かされる。古代においては 現在のハ行音はパ行音であつたといわれていて 現在でも宮古島では原のことをパルと呼んでいる。このことは 古代史のなかに出てくるいくつかの遺跡も「パル」を使用している。例えば 福岡県糸島郡前原町を「マエバル」と呼び 井原や平原の遺跡も「イバル」・「ヒラバル」と呼んでいることなど考えると 多くの場で共通した音律があることに気

がつく。とくに 邪馬台国にまつわるまぼろしの美女卑弥呼は 中国漢字の上古音で読めば「ピミカ」であつて アイヌのユーカラにもそのような音律があつたような気がする。N・N・チェボクサロフによれば 現在の朝鮮語とインドネシア語とのあいだには とくに稲作文化にまつわる言語のなかにある種の類いがあるということから マライ・ポリネシア語族に属するインドネシア系の言語を基礎にして中国江南系あるいは山東系の言語の両者が混合して 朝鮮半島へもたらされ さらに倭国の西部へと渡来したということのべている。

そのようなことからみると 宮古島にポリネシ語の基礎部が残っていても当然のことのように思える。歴史学者や人類学者の多くが 言語を強調して民族の流を思考したこともあつたが 最近の人類学ではこの点に余り関心を示していないようである。だが現実には 多くの共通語があることもみのがすわけにはいかない。例えば「ナゴ」という語原にも 名護屋 奈古 那古 名古屋らが残っているし 「カ」のつくアイヌ語との関係においても 香取 鹿島 男鹿など多くの地名がある。このことが 従来考古学者のあいだで討論されたアイヌ説の要因の一部になつたのであるが 人類学者今村豊氏や地質学者松本彦七郎氏が強く反発されたとのことである。しかし 現代の多くの考古学者が地質学との関連のなかで 文化の流れを思考錯誤しているようであるので 地史的な観点から琉球列島をみる必要がある。琉球陸橋は ほぼ中期洪積世(15万年)末期まで大陸とも南方とも陸つづきであつたことが推察される



第8図
沖縄本島で発掘された縄文式土器
(沖縄の自然 平凡社より)

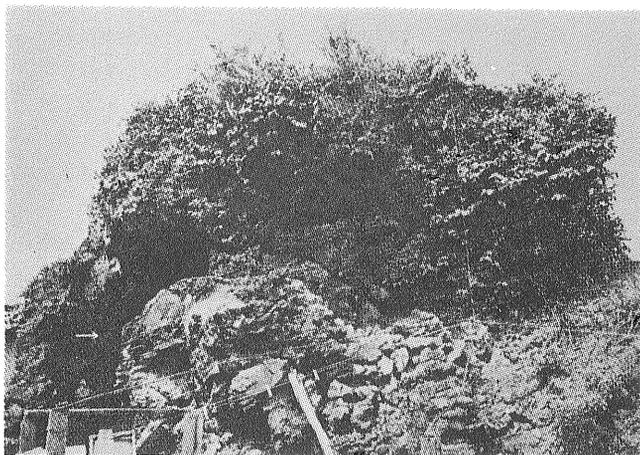
ことから 旧石器文化や まぼろしの帝釈原人を朝鮮陸橋に重点をおいた考えもあるようであるが 氷期という自然の猛威のなかで原人は高緯度より低緯度を望んだであろう。 そのことが 身長 134.8センチ内外の背が低い 今日のパピミーやブッシュマンの仲間が縄文人の祖型といわれる理由のように思えてならないし 柳城動物群や万県動物群を追いもつめた洪積人がいてもよいように思う。

古代文化を区切った宮古凹地

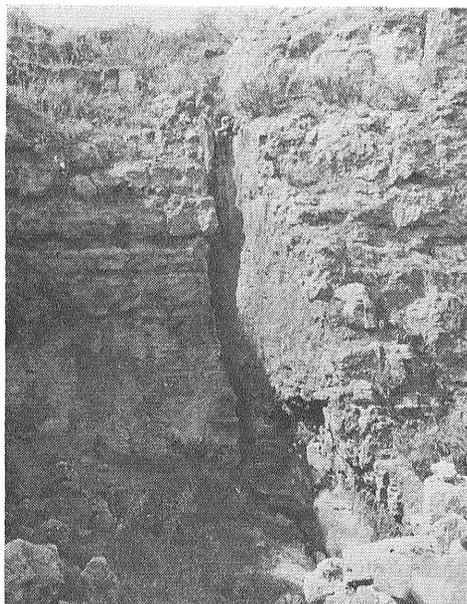
邪馬台国にまつわる関係出版物の増加によって ここ3～4年はいわゆる古代史ブームが空前のヒットをつづけている。 しかし筆者が「つれづれ」に書いている南島は 日本の古代史に顔を出す範疇にはないし 考古学の立場からみても 先島群という特異な文化圏に入り縄文式土器の南限の外にあるのである。 八重山・宮古島では広楕円形の円筒斧と篋形石器や有稜石器らが出土していることから ルソン島やインドネシア・ポリネシ

ア的なつながりを考えられているようである。 宮古島より産出した石器は 保良元島御嶽西方50mほどにある畑の表面採集で四個共に30mぐらしか離れていない。 石器は 灰黒色の堅い石質で製した石斧であって 島内の石ではない。 石もり 石錐の石質は 島内産のトラパーチンである。 しかし 沖縄本島には 現在まで石器の発見がなく 宮古島と沖縄との間だには 考古学的な境いがある。 このようなことは 北から来た文化(縄文式土器)は 沖縄本島を南限とし 赤色無文土器の南限が臥蛇島であることと 地質や動物相と共通するトラカ海峡や渡瀬線ならびに宮古凹地にほぼ対応しているように思われる。

とくに最近では 洪積世にまつわる日本原人がかなり古い時代の傾向もあることから 多くの古代史の文献のな



第9図 「山下人」3万2千年が発見された山下洞穴(沖縄の自然平凡社より)



第10図 「港川人」1万8千年が掘出された石灰岩の割れ目

かに地学との関連を重要視する風潮がみられ 特に氷期との組合せを重要な要素に考えている研究者が多くみうける。

すでに「その4」でのべたように 宮古群島に発達する石灰岩の地質時代と 沖縄本島より発掘された「山下人」3万2千年の時代とでは一部で同一の時間帯に入ってしまう。とくに読谷石灰岩は 3~4万年内外の年代といわれていることからみると 「山下人」が活動したころの形成ということになる。さらに その上位に形成された牧港石灰岩の裂け目から出土した「港川人」は 1万8千年といわれていることからみると われわれがあっかっている一部の石灰岩は すでに考古学や人類学の分野に入っていることを認識しなければならない。宮古群島の島嶼化時代はリス氷期ごろ(海面変化-100m)ではないかと前述した。日本でいうポロシリ氷期以後 すなわち下末吉ローム層ころということになる。地質年代区分でいうと 15万年頃に相当することになる。この15万年から 下地島石灰岩(読谷石灰岩と対比している)形成時3~4万年までの空白が 筆者のいう大野越粘土の大部分がこれに相当する。この大野越粘土は 一名赤色土と呼ばれる陸成の表層古土壌で普通テラロッサと呼んでいるが 筆者らは化学組成よりラテライト質土壌と呼んでいる。この時代の一部には パレオロクソドン・カプレオルス・トクナガイ鹿などの哺乳類化石が多産している。すでに前でのべたような Pecten らを示準として 地層の対比を考えてみると ほぼ下末吉ローム層末期から武蔵野ローム層の時代に対応し 氷期年代区分ではリス・ウルム間氷期からゲトワイゲル間氷期までの間に相当する。しかしこの時

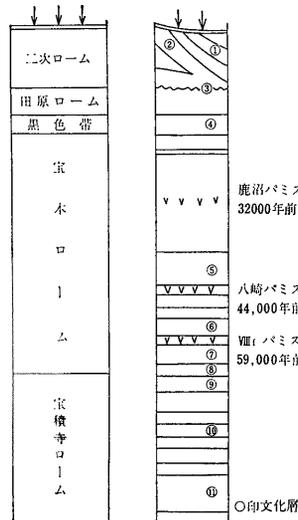
代は 南西諸島の大部分は島嶼化したという従来の定説もあって 本州のように大陸とのつながる陸橋は存在しなかったであろう。このことは ナウマンゾウやオオツノシカで代表される北方系の哺乳類の時代は当然ありえない。したがって宮古島で発見されたパレオロクソドンをふくむ動物相は 長野県野尻湖で発掘されたナウマンゾウより古い時期に移住したものと考えなければならない。「きわめて疑問なことは リス氷期にも大陸から移住してきたにちがいない 哺乳動物の化石についての資料ははっきりしないことである」(湊正雄・井尻正二「日本列島第3版」岩波新書)がのべている疑問への答えかも知れない。

栃木県星野遺跡から出土した珪岩製石器が 中国の周口店の旧石器と類似することから 下末吉ロームの時代にすでに「ヒト」が大陸から渡来したという芹沢説がある。

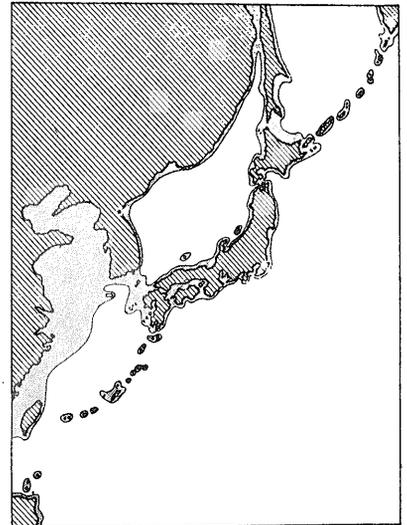
この星野遺跡の第11文化層の年代は 堆積速度と 第8文化層(5万9千年)年代とを考慮して 計算すると 9~11万年ということになる(鈴木正男「過去をさぐる科学」講談社) ということになると 筆者のいう大野越粘土層は 中期旧石器文化の前半に相当し 年代的にみると 3~4万から15万にかけての時代に形成された風化土壌(陸式)ということになる。したがってこの大野越粘土のなかには 中期石器文化の謎が含まれていることになるが 現在まで 前述の石器以外は考古学的な意味を持つ石器は発見されていないし 人骨にしても現在まで情報は皆無である。このようなことを地質学的背景より推察すると 次のような結論が得られる。すなわち 宮古の島々は ほぼ15万年の頃の島嶼化によ



第11図 「港川人の頭骸骨」(たかしよいち著「三つの海峡」河出書房より)



第12図 星野遺跡 文化層の年代(鈴木正男著「過去をさぐる科学」講談社より)

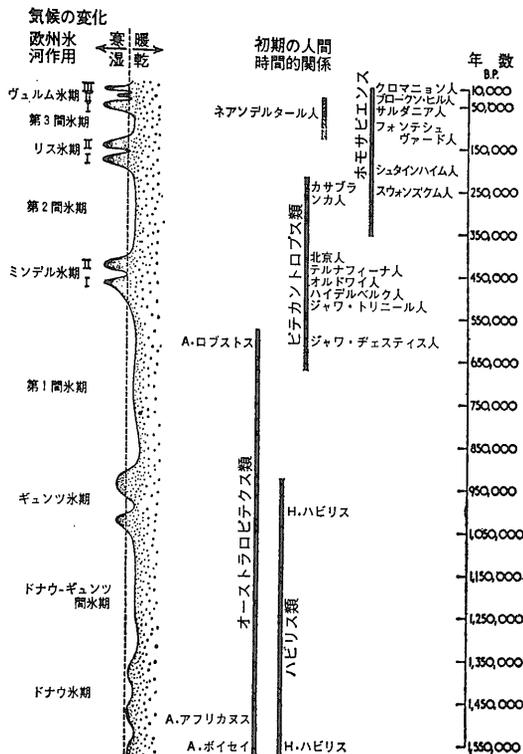


第13図 リス氷期の日本列島(湊正雄・井尻正二著「日本列島 第三版」岩波新書より)

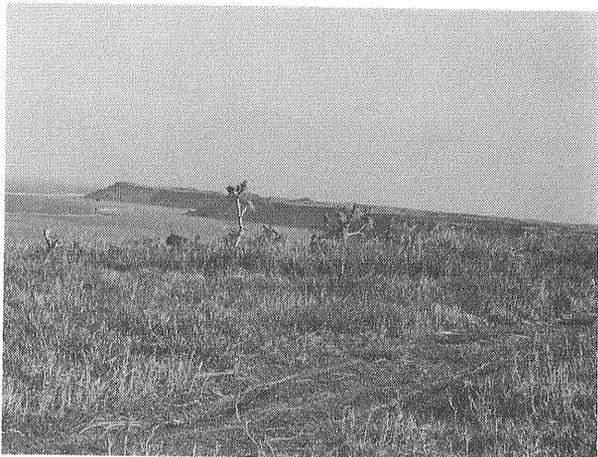
って 南方からも北方からの陸橋はたたれてしまい それ以後陸路による文化の交流は考えられない。 したがって 武蔵野海進以後に宮古動物層に含まれる哺乳類動物が渡って来たという仮説は通用しないし かりに「ヒト」が出現したとしてもこの時期より古い時代での渡来であるという結論になる。 したがって 下末吉ローム時代に「ヒト」が渡来したという芹沢説も今後ありうる可能性もある。

宮古諸島を大陸と地続きにしようとするれば 2,000m も海面が下がらなければならないが 氷河時代の海面低下で2,000mの落差は何としても説明が出来ない。 洪積世の最も海面低下の激しかった氷期はウルム氷期（およそ2万年前）でも海面変化は-130~-140m内外であることから いわゆる南島は大陸とも日本列島とも続いていたなかったということになる。 そうなると沖縄本島にいた港川人や山下人はいったどこからやって来たのだろうか 多くの疑問がわく 当時（旧石器時代）のヒトが舟をもっていたという証拠は どの国の考古学的資料にも存在しないことから 海を渡ることは現段階での考古学的常識から拒否される。 そうなると山下人や港川人は 琉球列島が島嶼化した15万年前に渡来して来て

1万8千年の時代まで生きながられた人類ということになる。 しかし港川人の人骨は 北京原人クラスの20~30万年前の人骨ではなく 旧石器時代人といわれている。 山下洞穴や港川遺跡を調査した渡辺直経さんは 東支那海が浅く陸地の昇降や海水面変動の幅を大きく見積ると氷河期に広大な海底が陸上に浮び上がったことは充分考えられるとのべ 沖縄群島の西側海溝を迂回して西北または北の方から沖縄本島へたどり着いたのではないかと いう 見解を示している。 しかし 氷河期の海面変化だけでは 中部群と北部群を結びつけることは 地質学的にみて困難に思えるが 中部群と先島群を結びつけるよりも簡単なように思う。 とくに北部群には 新期火山群の活発な時期もあることとあまって多少の地殻変動もそれに関連したようにも考えられる。 いずれにせよ 3万年から1.8万年前には 沖縄本島にはヒトも動物も渡っていたことは否定できない。 このようなことからみると ただ漠然と琉球列島の島嶼化した時代という考え方よりも 琉球弧を区分して考えるべきではないだろうか 例えば 琉球弧の第1・第2グループは 筆者のいう島嶼化した時代が 第3グループに比較して多少おそい時期に島嶼化したか あるいは特定期間だけ陸橋があったのではないかと いう疑いがもたれる。 そのことを理由づけるのが前述の縄文土器の南限が沖縄本島止まりであること 沖縄本島には石器文化がないのに対して 八重山・宮古には南方系のルソン島や紅頭嶼・火烧島などに見られる広楕円形の円筒斧と篋石器が発見されていることからみても 先島群と中部群の間には明瞭な考古学的な境界が認識される。 この考古学的境界は地質学的にみるとほぼ宮古凹地に対応しているように見える。 この宮古凹地の水深は ほぼ2,000mであるが 琉球列島のなかでもっとも深い海峡である。 したがっ



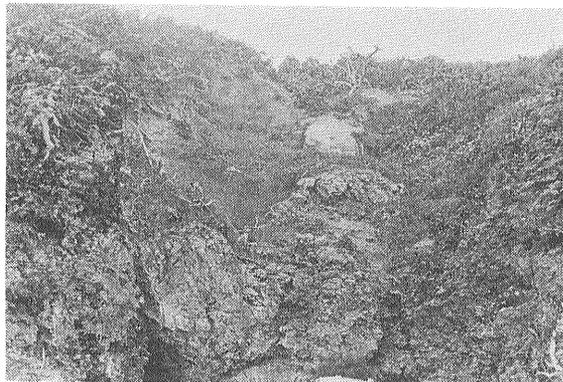
第14図 最新世の氷河期 前人の主要化石群および化石人類 (Michael Day の Fossil Man から引用)



第15図 宮古島でもっとも高い台地(113m)



第16図 中位の段丘(友利石灰岩の Tip)



第17図 石灰岩を不整合に被う大野粘土

て 氷河時代の海面変化を いかように見積てもこの海峡をうめつくすことは出来ないであろうし 人類学や考古学の場合においても 明らかな文化圏の相異が認識され地学という学問の場合から 古代史につながる一連の学問の見なおしにも必要のように思われ これからの学問が解き明かさなければならない重要な問題である。 とくに「その4」でのべた沖縄舟状海盆の南限切る琉球構造線はほぼ中央構造線の延長上にあることや 活断層という指摘もあることから 今後充分検討を必要とするように考えている。

大野越粘土のこと

沖縄といえば よくサトウキビやパイナップルの話題がでる。 さんさんとふりそそぐ陽光の常夏の国は 当然多くの幸にめぐまれている。 しかし 宮古群島にはパイナップルが育たない。 いわゆる 酸性土壌がないのである。 このようなことから 島の基幹産業はサトウキビだけになっている。 このサトウキビをつくり上げている母胎である土壌は 第三紀層の島尻層群の風化土壌のシャーガルと 琉球石灰岩の上にある風化土壌のラテライト質の土壌である。 前者は 灰色をし粘土質で肥沃な土である。 後者は 赤色の粘土質で貧乏な土である。 筆者は このうちの赤色の粘土質土壌を大野越粘土と呼んでいることは前述のとおりで この粘土のなかに含まれる地質学的内容ならびに考古学的の意見を多少のべたが 最近「琉球列島の表層土壌に含まれるマンガン塊」(地質ニュース no. 260) という記事との関係もあるので そのような観点を含めて 大野越粘土にまつわる問題にふれておく。

大野越粘土は 宮古島の広い地域で見られるが もっともよく発達する地域は模式地とした大野越付近ならびに州鎌地域である。 層厚は 模式地付近で厚く4~5 m目測されるが 場所によってはそれ以上の厚さがある

といわれている。 昭和14年に実施した燐鉍石調査団の手によって実施されたボーリングでは 以外と厚く10m (土地の古老の話) 内外といわれている。 掘った場所は棚原洞穴 (パレオロクソドンを産出した) の南東約500mの地点で 地形的には凹地である。 現在もこの地点は 採土場になっている。 この大野越粘土の地表から1~2 m付近には 黒褐色粗質の団塊が不規則に散在する。 団塊の大きさは 不ぞろいで大は5~7 cmくらいから 小は2~3 cm 内外が混存し それからネット状に風化土壌の割目を充填している酸化鉄 (厚さ0.3 mm以下) がみられる。

当初 (1969年) に宮古島を訪ずれた時期には 筆者も酸化マンガンではないかと思い 多くの試料を持ち帰り 同行した化学課の安部技官に分析していただいた。 その結果は SiO_2 13.36% Fe_2O_3 57.72% Al_2O_3 9.00% $+\text{H}_2\text{O}$ 14.88% であった。 その後 宮古島南部地域の同一層準についてもほぼ同一な団塊をみうけたが そこでは 大部分が板状の水酸化鉄が風化土壌の割目を充填しネット状に発達して団塊が少ない。 一般にラテライトは Fe 45~55% Ni 0.2~1.3% Al_2O_3 5~10% H_2O 8~15% といわれていることから比較すると 筆者が試料としたものは分析数値からみるかぎりラテライトと呼んでもよいように思う。 この大野越粘土を多くの人が テラロッサと呼んでいるようであるが 化学組成からみるとテラロッサは おもに Fe と Al の水酸化物と粘土からなる石灰岩に特有の土壌であって SiO_2 32~41% Fe_2O_3 12~15% TiO_2 1~1.5% Al_2O_3 32~39% ing. loss 11~14% となっている。 これでもよくわかるように ラテライトでは Fe が大に対して Al が少ない。 これに対して テラロッサは Al が大で Fe が少なくなるという傾向がある。 たしかに成因的には テラロッサと呼んでも問題

第2表 宮古群島の石灰岩と第四紀対比表

時代区分(絶対年代) 1,000年		海面変動 m	文化階梯 編年・人類	平坦面 氷期ライン	宮古周辺の地質構成	関東平野の地質構成			
沖積世	亜アトラン期 2.5	+ 2	新石器文化 鉄文化 青銅文化 新石器文化 文時代 新石器文化 細石文化 …… ナウマンゾウ	沖積面	西浜崎砂層 IV~(古砂丘)3.0?~ 白鳥崎石灰岩	上部有楽町層			
	亜ボレアル期 4.0						有楽町層		
	アトラン期 4.5								
	ボレアル期 7.5								
	先ボレアル期 9.0								
先ボレアル期 10.0									
洪積世後期	ウルム氷期 17.0	-70	後期旧石器文化	ウルム氷期 低段 ↑15m ↓ 群 ↑ リス・ウルム間氷期 40m	(洲鎌粘土?) ↑1969年に筆者が使用した	立川ローム層 下部有楽町層			
	主ウルム亜氷期 17.0	-130					立川礫層		
	25.0	-140							
	29.0	-100				中期旧石器文化	III下地島石灰岩 (下部)36~40.0? (段丘面10~30m)	武蔵野ローム層	
	ゲトワイゲル間氷期 44.0	+ 8							大野越粘土
	古ウルム亜氷期 72.0							+ 15	
リス・ウルム間氷期 150.0									
洪積中期	リス氷期 150.0	-100	前期旧石器文化	中位 リス間氷期 ↑70m ↓ 群 ↑ ミテル氷期 90m	宮古群島が島嶼化した 平良石灰岩 II友利石灰岩 Pecten. naganmanus (段丘面50~80m)	下末吉ローム 下末吉層			
	ミンデル・リス間氷期 380.0	+ 30 + 40					I保良石灰岩 (段丘面113m)	長沼層	
	ミンデル氷期 480.0	-100							
	ギュンツミンデル間氷期 500.0	+ 60							
洪積世前期	ギュンツ氷期 600.0	早期旧石器文化	高位段丘群 ↑ 最高位段丘 ↓ トナウ 最高位段丘	最高位段丘群 ↑ 200m ↓ トナウ 最高位段丘	島尻層群	上総層群			
	ドナウ・ギュンツ温暖期 600.0								
	ドナウ寒冷期 700.0								
	ハラミロ事件 900~1000								
	1800~2000 オールドバイ事件								

~~~~~不整合

がないように思うが 化学組成の点からはむしろラテライトと呼びたい。 いずれにせよ この風化土壌のなかにはMnが含まれないのが普通である。 したがって大城・野原が指摘するように この風化土壌のなかにMn塊の存在が明らかであれば 別な角度でこの粘土を位置づけなければならない。

この大野越粘土は 考古学的な立場で呼ぶと いわゆる文化層に対応する重要な一つの単元を意味するものであることは勿論であるが 地質学的にも多くの重要な鍵をにぎっている土壌であることは すでに前でのべたごとくである。 すなわち 下末吉ロームから武蔵野ローム層内外の時代に大部分が形成されたものであって 主

ウルム氷期前に相当する 比較的海面変化が「一」で支持される時間帯にあっている。換言すれば 関東平野に広域的にローム層を堆積した火山活動の激しい時期に相当する。地質年代でみると ほぼ15万年前から3～4万年前に充当される約12万年の間にあたる。大野越粘土の厚さは 前述の如く せいぜい2～4m内外であるから 地殻の岩石侵食の平均速度 0.003cm/年 という物理的定数で考慮すると 10万年でたかだか3m内外ということになって ほぼ12万年の試算数値と地表にみられる層厚が対応していることになる。このたった3～4mのラテライト質の土壌が いわゆる考古学的立場の研究者にとってはもっとも価値のあるパーツ(考古学的)が埋没すると予想されることから 文化層と呼んでいる理由でもある。この大野越粘土は 筆者のいうⅡの石灰岩の上位に不整合関係で形成されたものが大部分であるが 部分的に新しいⅢの石灰岩や 古いⅠの石灰岩の上位にもみられることがある。

これらの大部分のものは Ⅱの石灰岩上位に形成されたものが 二次的に流出して形成されたものである。しかし厳密には 風化土壌である以上一つの地層単元と他の単元との間にある時空的空隙があれば 当然それのみあう風化土壌が形成されるという理論がある以上 これに対応する物を認識しなければならない。その風化土壌がたかだか30cmでも そこに記録される時間空隙は 1万年の内容を意味することもありうるのである。このようなことの意味から 大野越粘土をⅠの石灰岩が形成されて部分的に陸化が予想される時代から 現在に到る時代までを含めて大野越粘土と呼ぶ層序表をつくった理由でもある。したがって 大野越粘土として一括してある風化土壌の内容には石灰岩と石灰岩との間にある不整合を意味づける時間面があるということになる。そして その時間の空白の間隙が大きいほど風化土壌の厚さは大きいということにも通ずる。しかし 実際は石灰岩の堆積機構のなかでのべたように 島嶼化した以後の新しい石灰岩は中低位段丘面以下に形成されていて 高位段丘面にはそれに担当する石灰岩はない。したがって この新しい石灰岩が形成されている時間帯には 高位段丘には風化土壌が整合的に形成されているのである。ようするに 大野越粘土(標式的に分布する処では)のなかには風化という現象がある以上不連続は成立していないのである。

よく南西諸島の石灰岩をいくつかの段丘面によって区別して 石灰岩を区分している。それは 南西諸島に分布する石灰岩が 氷期の海面変化(段丘地形)となって 往時の姿を現在の地表にみられることによる理由である。しかし 実際は琉球層群下部層の形成以後にも

多くの地殻変動(主としてNW—SE方向のステップ状の断層ならびにブロックごとにみられる傾動運動)をうけている事実が観察されることから 一概に海水面運動だけによって 石灰岩を区別することは危険なことである。しかし 宮古島周辺に発達している石灰岩の比較的安定している場での段丘面をみても ある共通した面が認識出来る。すなわち Ⅰの石灰岩の面は 110m以上 Ⅱの石灰岩の面は50～80m Ⅲの石灰岩の面は10～30mである。氷期と段丘との関係は 主としてヨーロッパにおいて研究が進んでいて そこでは一般に 最高位・高位・中位・低位の四つに区別されている。最高位はドナウ寒冷期 高位はギュンツ氷期～ギュンツ・ミンデル間氷期 中位はミンデル～ミンデル・リス間氷期 低位はリス氷期～リス・ウルム間氷期およびウルム氷期に対比されるといわれている。ヨーロッパで示されている段丘が 緯度経度の異なる宮古周辺の島々にそのまま通用するとは当然考えられないが すでにのべたこの地域の石灰岩の形成時期は氷期との関連があることから比較検討が必要であるように思う。なおライン川の中流に発達する段丘は 低位が15～40m 中位が70～90m 高位が130～200mといわれている。このようなことから宮古島周辺の島々に発達する段丘を比較してみると 低位段丘群に入るものは Ⅲの石灰岩に相当し 中位段丘群に相当するものがⅡの石灰岩に対応し 高位段丘群に入るものがⅠの石灰岩ではないかと考えている。とくに Ⅰの石灰岩は 宮古島では119mでもっとも高い標高を示す面であるが この石灰岩に対比している沖縄本島の系数石灰岩は130～180mの段丘面を示していることからみると 本来Ⅰの石灰岩である保良石灰岩の面は 現在の110m面は高いものであったように推定される。

以上のようなことから 宮古群島に分布する石灰岩と氷期との組合せを考慮してみると Ⅲの石灰岩はリス氷期～リス・ウルム間氷期およびウルム氷期に対比され Ⅱの石灰岩はミンデル～ミンデル・リス間氷期に相当し Ⅰの石灰岩はギュンツ氷期～ギュンツ・ミンデル間氷期に対応する。このことは その4でのべた筆者の石灰岩形成の地質時代と偶然にも一致するようにみうけられなんとなくうまい話でかえって 疑惑がわく しかし 現在までにつかみうる年代的な情報もふくめて検討してみても余り大きな矛盾がないように思われるが Ⅲの石灰岩の形成年代が 多少古くなることが考えられることと Ⅰの石灰岩の形成年代を ギュンツ～ギュンツ・ミンデル間氷期まで下げてよいのか 筆者自身多少の迷がある。